

流刑の皇子

阿久根治子

新潮社

流刑の皇子

阿久根治子

新潮社

流刑の皇子

定価一〇〇〇円



発行 昭和六十一年十一月二十日

六刷 昭和六十二年七月三十日

著者 阿久根治子（あくねはるこ）

発行者 佐藤亮一

発行所 株式会社新潮社

162 東京都新宿区矢来町七一 振替東京四一八〇八

電話 業務部 03（266）五一一 編集部（266）五四一一

印刷所 二光印刷株式会社

製本所 大口製本株式会社

© 1986 Haruko Akune, Printed in Japan

乱丁・落丁本は、御面倒ですが小社通信係宛御送付下さい。送料小社負担にてお取替えいたします。

ISBN4-10-364201-7 C0621

* 流刑の皇子 * 目次 *

第一章 金冠出土す 7

出土の瞬間 9

軽の太子との出会い 12

崇りのお山 17

奉納相撲の土俵の場 19

銅矛と東宮石が語るもの 24

陵墓参考地、決定前後 35

偶然か、はたまた…… 40

宮内庁の「ない、ない、ない」 46

第二章 謀略・流血・断罪 51

血塗られた王朝 53

性的タブーを検証する

64

黒幕的豪族の名

70

軽の実力と聖呪の恋

78

不吉な予言歌

94

太子流刑

102

己が死に寄せる挽歌

112

第三章 瀬戸内にふりまかれた呪咀

121

太子流刑の原因を求めて

123

流刑の航跡をさぐる

127

玉津島神社と衣通姫

129

太子兄妹鎮魂の島

140

五輪の姫塚

148

第四章 千五百年の眠りの果てに

金冠の行方をたずねて

159

金冠の主は誰か

166

宮内庁書陵部陵墓調査室にて

169

川之江からの訪問客

175

二基の石棺——なぜ二つなのか

179

いまでも絶やさぬ祀りの灯——生きている東宮山

183

一九八四年十月二十日

188

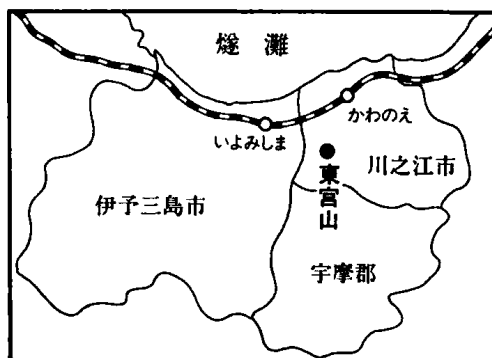
あとがき

197

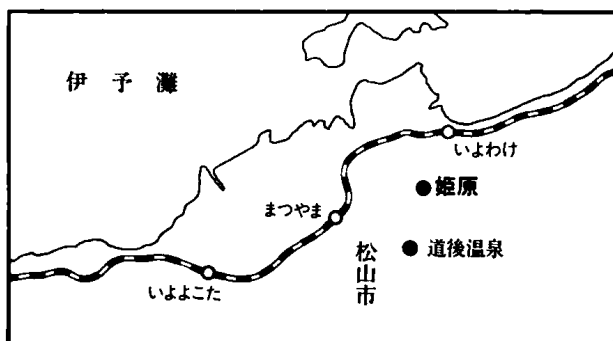
流刑^{るけい}の皇子

第一章 金冠出土す

東宮山古墳と川之江市略図



姫原と道後温泉略図



瀬戸内海要図



出土の瞬間

瀬戸内海・燧灘ひうちなだに映える落日が、金冠出土の一瞬を照らしだした。

明治二十七年（一八九四）三月二十日、当時でいう春季皇霊祭の日の日没近くであった。四国は愛媛県宇摩郡妻鳥村めんどりむら字春宮。現在の川之江市妻鳥町めんどりまち字東宮にある東宮山山頂の古墳から、数人の村人の手によって金冠が発見された。

「『冠が出たあ、冠が出たあ。』

そう大声でさけんでな、あの東宮山の坂をば、うちのおじいさんが胸に金の冠をかかえて、駆けおりてきなはる。それこそ、今にもこけんばかりに駆けおりてきなはるきに、わたしらは、もう魂消るやら畏ろしいやら、ただわなわなして、麓の方からこう仰いでおっただけじゃけん、瀬戸の海をわたって射す西日が金の冠にぴかっと光って、そりゃきれいかったよ」と――。こんな風にいうて、おばあさんは、その時のことをよう話してくれました。いや、もっとも、実際そんなに光ったもんかどうか、これは分りませんがね。年寄りたちには、たしかに光って見えたらしいです」東宮山古墳の陵墓守部・佐藤和正氏が、東宮山の、ヤマツバキやタブの古木に包み込まれるような急傾斜の石段、昔は坂道だったところを指さしながら語る、祖母佐藤このから聞いたという金冠出土の瞬間の情景である。そのとき、金冠を胸に抱いたのは、氏の曾祖父佐藤定治だった。

金冠、もっと正確に言えば金銅透彫えんどうすうかく帯冠は、泥と青錆にまみれ、ひどく破損していた。しかし、

後年の調査によれば、冠の両端と上縁は欠け落ちていたものの、唐草模様の透彫りが見られる裾からの高さは、中央に立ちあがる前立て即ち立挙のところ、約十六センチ。立挙の中心とその左右両側には、直径一センチ足らずの丸い皿形歩揺が針金で留めてあり、波濤状の透彫りを入れた腰の右上には、魚の形をした金銅製の薄板に細かい細彫りで頭や尾鰭ばかりか全身に半円形のうろこまで刻んだ、長さ三センチほどの魚形歩揺が、しっかりと結びとめられたまま残っていたという。

歩揺とは、文字通り歩くたびにゆらゆらと揺れ動く金製か金銅製の装飾品の一種で主に冠や甲冑にとりつけられていた。いささか飛躍に過ぎる例かもしれないが、ショードンサーの髪飾りや衣裳の胸や腰などに付け提げられ、歌に踊りに体が躍動すると、ライトを反射してきらきらと揺れ輝くメタリックな飾り、あれなども、現代風歩揺といえるのではないか。

この歩揺によって装飾をほどこした品々が出土している古墳は、ここ東宮山古墳の他に、日本国内では、いわゆる仁徳陵、一説には允恭陵かともいわれる堺市の大山古墳や、奈良県橿原市の新沢千塚一二六号墳等々がある。そして大山古墳からは冑が、新沢千塚一二六号墳からは金冠が、出土の際いづれも丸い皿形歩揺をつけていたと報告されている。

また西へ海を渡れば、百済・武寧王陵出土の冠飾や、新羅の都だった慶州・天馬塚の金冠の歩揺が有名である。なかでも、高句麗の北西にあつて二世紀後半より中国東北部に勢力をふるい後に北魏を建国した鮮卑族の古墳からの出土品には、特に歩揺装飾が多いとか。騎馬民族といわれる鮮卑族は、殊更に黄金と歩揺装飾を好んだと聞く。

昭和四十七年（一九七二）、私は天山山脈西麓からトルコ国境近くまでシルクロードをたどり、中央アジアを横断した。その旅の際にもつくづくと感じたことだが、晴れた日の大陸の空は、あくま

でも広い。それは、空よりは天、天よりは天空と呼びたい。ふり仰げば、さながら碧く透明な巨球を真横に断ち割り、大地に据えたかと思える。その大地も大陸東北方ともなれば大草原とは名ばかり、見渡す限りごつごつした地肌がむき出して、ただ所々に茶色っぽい草が地を這っている北方大陸特有のステップが続く。どこまでも荒寥とした曠野に、騎馬民族鮮卑の勇者等がいつせいに馬を駆る時、馬上の冠や甲冑に激しく揺れる黄金の歩揺は、何もさえぎるものもない天光にきらめいて、見る者の目を眩惑し胆を奪ったことであろう。本来、金色の歩揺を生かすのは、躍動する速度と、広大な空間、そして充分な光とであった。

それにしても、瀬戸内は東予の小村にある東宮山古墳から出土した金冠に、大陸北方に勇躍した騎馬系民族が好んだ歩揺と、海洋を象徴する魚形のデザインという、陸海両極のものが一つに結実している事実は、何を物語っているのだろうか。

なお、魚の形を模した出土品を他に探すと、応神陵かといわれる誉田山古墳からの土製品や、継体天皇との関係が濃いとされる滋賀県高島郡の鴨稻荷山古墳から出た腰飾りらしい金銅製双魚形珮^{はい}飾などがある。

話を前にもどす。東宮山古墳の陵墓守部・佐藤和正氏より、例の「冠がぴかっと光って、そりゃきれいかったよ」という祖母^{おばあさん}の、さんの昔語りをうかがっているうちに、五世紀後半から六世紀にかけての古墳からは、頭の上から足の先に至るまで金色燦然たる品々が出土することがあるといわれていることを思い出した。

おそらく、金色の輝きを見たというおばあさんの目に、間違いはなからう。いや、その金色の光こそ、朽ちた金冠になお残るいくつかの歩揺の、青錆の間からわずかにのぞく金の地肌が、折から

の西日を反射して、文字通り揺れ輝くさまだったにちがいない。

そして、この一瞬の金光から発した歴史の糸は、千五百年余の過去を、黄泉の闇から確かな事実としてよみがえらせ、ただいま現在に、しっかりと繋いだのである。

ここにある歴史の糸を手繰り返すとき、金色に輝く冠は、どんな人物の頭上に立ち返って行くのか。また、もともと王侯貴族にこそ似つかわしい歩揺つき金銅透彫帯冠が、なぜ都を遠く離れた伊予の僻村に築かれた小墳から出土したのか。更に、これほどにも貴重な日本歴史の証しのひとつが、沈黙のまま、どこに、どのように行方しているのか。

軽の太子との出会い

今から二十数年も以前に、古事記に記されている一首の挽歌を読んだ瞬間、私はただならぬ予感に打たれた。それは、流刑の地で自ら果てた木梨の軽の太子が、己が死に寄せて歌ったと伝えられている歌である。

皇統の連綿を伝える書と見なされてきた古事記は、戦前戦中は皇国史観によって聖典視され、戦後は逆に左翼史観によって極端に軽視され、蔑視さえされた。

だが、古事記は、ほんとうに皇統連綿の証しのために編まれた書だったのだろうか。と言うと唐突にひびくかもしれないが、古事記が、もつとも情熱的にしかも詳細に物語るのは、実は、皇統の

めでたき継承者のことではなく、皇統からはずされた敗者たちの生涯だからである。その主人公は、大國主命、ヤマトタケル、そして木梨の輕の太子……。

古事記は上中下の三巻に分れ、上つ巻は神話、中つ巻は説話、下つ巻は史話的な内容となっている。

本書の主人公である木梨の輕の太子の物語は、比較的史書としての要素の濃い下つ巻に、十三首の古代歌謡を連ねて、同母妹との恋、王位継承にまつわる政争に敗れての流刑、そして自死による終焉までが記されている。

ところが、なぜか明治以来、木梨の輕の太子の物語は、意識的に抹殺されてきた。木梨の輕の太子の物語が、なぜ私たちの耳目から疎外されることになったのか、その顛末も、また、ぜひとも解き明かさなければならぬ、重大な謎である。

古事記は、木梨の輕の太子の生涯を語るのに、多くの古代歌謡をもつてする。そして、古代歌謡によってつづられているがゆえに、その物語が、まず文学作品として読まれ、史的資料としては、ほとんど一顧だにされないような位置におかれることが多かったこともひとつの理由であらう。

しかし、古代には、たとえ史書であつても一般的な散文文体では伝達しきれない出来事が数多くあつたのではなからうか。いいかえれば、韻文の、歌謡体の姿によつてはじめて全き状況を伝え得るような出来事があつたのではないか、と私は考える。

古代、歌はいのりの所産であり、ときに呪術の象形そのものでもあつた。非命の貴人を主人公とする事件を伝承しようとするとき、伝え手がおそれおののかざるを得ないのは、怨念に荒ぶる貴人の魂のこと。その鎮魂のためにもっともふさわしい伝承の語り口は、歌謡においては無かつた。

この考えに立つとき、多くの古代歌謡をともないつつ語られている古事記そのものが、その編集時において、すでに滅び去っていたかつての倭朝廷に対する鎮魂の書であった、という推定も成り立つ。少くとも、皇統の敗者たちを物語る部分は、彼等への鎮魂を、意識的に重視して記されていることが明らかである。

物語の悲劇的終末をかざる挽歌の深奥から、木梨の軽の太子の絶望と怨念の叫びが響いてくる。私は、太子の物語の紙背に潜んでいる、何ごとか生々しい事実を直感せざるを得なかった。

そして――

その直感を、事実として証明すべく、木梨の軽の太子の物語を跡づける、私の長い旅が始まった。木梨の軽の太子といえば、五世紀なかばに同母妹との禁忌の恋を犯した廉で、日本最初の流人となった貴人である。その配流の先や終焉の地を、通説が伊予・松山としているのは、古事記、日本書紀の所伝による。

古事記によれば、允恭天皇の第一皇子の軽の太子は、天皇崩御の直後、即位を目前にしながら妹皇女の軽の大郎女（衣通姫）との禁忌の恋をとがめられて伊予の湯へ流された。そして、まもなく太子の後を慕って来た妹皇女と共に、その地で果てたとある。また日本書紀は、原因をほぼ同じくしながら、伊予へ流されたのは妹の軽の大郎女皇女の方で、木梨の軽の太子は捕えられた後、畿内にあった物部の館の内で自殺したと記し、一説に木梨の軽の太子も流された旨をつけ加えているが、その場所は伊予とあるだけで、詳しい地名を特定していない。そして、これまで、木梨の軽の太子の終焉の地に言い及ぶとき、ほとんど誰もが古事記のいう伊予の湯説をとってきた。その場合